私たちの大切な地域医療を守るために

～郡上市の今後の地域医療をみんなで一緒に考えよう～

医療を取り巻く環境は大きく変化し、特に私たち郡上市のような地域では、医療環境の維持が難しくなっています。そのような中で市民のみなさんの健康を守っていくためには、行政や医療機関だけでなく、市民のみなさんのご理解とご協力が不可欠です。そこで郡上市における地域医療の現状や課題等を広く知っていただくため、病院や医院の先生方にご協力をいただいて広報誌でお知らせしています。

第4回目となる今回は、八幡病院　坂本仁理事長に寄稿いただきましたのでご紹介します。

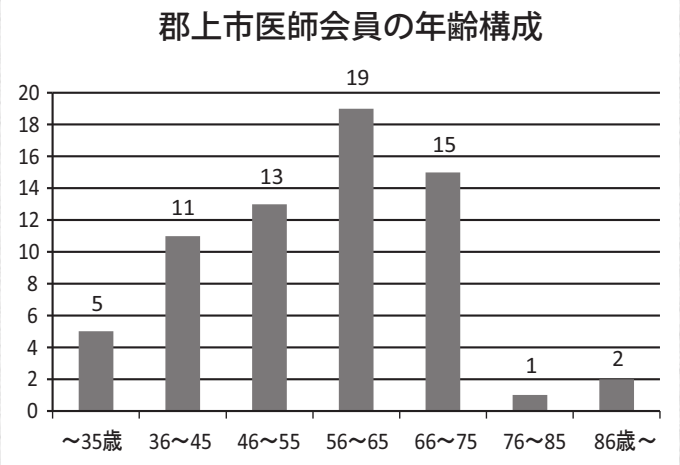
▲八幡病院
坂本理事長

郡上の医療はいつまでもつのだろう？

私が、郡上八幡に医師として帰ってきたのは2000年4月、郡上市の人口は5万人を超えていたと思います。17年目になり、市役所の人口統計を見ると4万3千人を割っていました。小中学校の運動会に行っても、子どもがどんどん少なくなっている気がします。超高齢化が進みます。そしてまた、医師の私たちも歳をとっていきます。

グラフ（下図）は、郡上市医師会員の年齢構成です。一見バランスよく各年齢層の医師がいるように見えると思います。しかし、50歳以下の医師で、郡上市に骨を埋める人は、数えるほどしかいないかもしれません。なぜなら、若い先生のほとんどは大学病院から派遣されている医師だからです。若い先生は、数年で同年代の医師と交代していきます。よって、5年後10年後には、若い先生の数は変わらず、今は一番多い年齢層の医師達がどんどん歳をとり、働き盛りの医師がいなくなってしまう気がしてなりません。

その傾向に拍車をかけることがあります。平成16年から始まった初期臨床研修医制度に加え、これから始まる新専門医制度のために、若い先生とその先生を指導する熟練の医師が、郡上市のような地方からいなくなってしまうかもしれないのです（詳しくは、第2回（広報5月号）の片桐先生の稿参照）。



郡上市の医療で問題なのは、もちろん救急患者の受け入れなど急性期の医療が郡上市内で完結しきれないこともありますが、入院患者を受け入れる常勤医師の数が圧倒的に少ないことにあります。小児科然り、産科然り、内科然りです。また、郡上市の病院で夜間の当直医を自前で賄っている病院はありません。皆、大学病院などからの当直医派遣に頼っています。その当直医の確保でさえギリギリやっとこさ、なのが現状です。近い将来、入院患者を診る常勤医師が減れば、軽い肺炎くらいでも郡上市外の病院に入院しなければならないかもしれません。そうならないようにしたいのですが、なかなか良い案はありません。

八幡病院では、90歳になってもバリバリ入院患者を診てくれる吉田先生が居てくださるからこそ成立していると言っても過言ではありません。これから一人でも多くの常勤医師を確保しなければなりません。また、在宅介護サービスを充実させようとするならば、病院の外に出ることができる医師を多く確保しなければなりません。私もなかなか病院を空けられないので、気づけばここ10年以上一度も旅行に行っていませんでした。愚痴っぽくなりましたが、これが今の郡上市の医療の現実です。

医師の確保も地産地消を目指したいところです。郡上人から医者を育てるよう学費の負担などが必要になります。ただ、一人前の医者を育てるには大学の6年間と卒後10年間、計16年は必要だと思われ、かなりの長期計画が必要で簡単な話ではありません。

取り敢えず、私たち医師は今やるべきことを踏ん張ってやるしかありません。といったところです。

暗い話ばかりなので、ちょっとアナウンスを。

今年度から内視鏡検査による胃がん検診が始まりました

今年度から、郡上市でも内視鏡検査による胃がん検診が始まりました。郡上市のバリウム検査による胃がん検診受診率は20％とまだまだ低いようです。内視鏡検診も始めることにより、受診率を上げて、早期発見していきたいです。胃がんは早期であれば、内視鏡手術あるいは腹腔鏡手術で、体に負担が少なく治すことができるようになっています。内視鏡検査による胃がん検診は、郡上市在住の50歳以上の人が対象になります。検診の申し込みは、市役所健康福祉部健康課にお問い合わせください。

また、平成29年～31年度の間、モデル事業として40歳～69歳の人は無料で大腸がん検診を受けることができます。この機会に受けたことのない人は、ぜひ検診を受けてみましょう！

郡上市を皆で守るためにも健康第一で。検診は大事ですよ。